様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18530678
研究課題名（和文）　造形美術教育におけるインターネット研修システムの構築
研究課題名（英文）　The Construct the Internet System of the Teacher Study and Training In case of Art Education

研究代表者
降籏　孝　（FURIHATA TAKASHI）
山形大学・地域教育文化学部・教授
研究者番号：20302284

研究成果の概要：実態調査の結果考察などから現在の学校教育における造形美術教育の現状と問題点及び課題をあらためて明らかにすると共に、既存のインターネットの具体的な検証から教員の研修システムとして必要なコンテンツの要素を確認することができた。最も大きな研究成果としては、造形美術教育の在り方に大きな影響を及ぼす「潜在的なカリキュラム」の存在に着目し重要なコンテンツとして帰着できたことである。その存在を教師自身に理解させ意識の上に教育実践させることは教員研修システムの構築において不可欠な重要事項となる。しかしながら「潜在的なカリキュラム」の確認は容易でなく今後の大きな課題として残った。次の研究目標としては、学校教育現場に有効に働くような実践的な研修システムの実働化である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：造形美術教育
科研費の分科・細目：教科教育
キーワード：造形美術教育・図画工作・美術・インターネット・教員研修

１．研究開始当初の背景

（１）高度情報化社会のインターネット環境
研究開始当初においては、高度情報化社会に中でインターネットの利用があらゆる分野で加速度的に拡大している状況があり、それは現在まで継続し今後も増加すると予想される。その状況は、社会一般のみならず我が国の教育界においても無縁ではなく、文科省をはじめとして多分野で利用し活用され始めてきている。

（３）造形美術教育の現状と課題
近年のＯＥＣＤ国際学力調査の結果や全国学力調査などの学力問題等で、学校現場は「読解力」をキーワードに、国語や算数・数学が益々重視され、それと対照的に本研究の対象である

（２）学校教育現場の職場環境
学校教育現場における教員の職場環境は、児童・生徒指導や部活指導、校務分掌、保護者対応など教科指導よりも生徒等の指導や雑務に追われる多忙で厳しい状況が存在し続けている。そのような状況の中では、教師自身が自分自身の教育実践を振り返り授業をより良くするような自主的な研修に取り組む意欲やゆとり、そして物理的な時間さえ見いだせない状況がある。

造形美術教育の存在が薄いものとなっている。
本来「学力」としては学力調査等の筆記試験にてはかるものばかりではなく、目には見えないが知情意のバランスをとる側面も存在する。その一部を担うのが造形美術教育であり重要な役割と使命があるととらえている。
そのような厳しい状況の中でも、インターネットのオンデマンド性を利用することで、教員のために必要なコンテンツを提供し、研修としてのシステムの構築が可能ではないかと考えた。

2．研究の目的

本研究の目的は、学校教育における小学校の「図画工作」、中学校・高等学校の芸術科目「美術」を中心とした造形美術教育の抱えている問題点と課題を明らかにすると共に、改めて造形美術教育の教科構造とその意義と役割を再確認する。そして、存在する造形美術教育の問題点と課題を少しでも解消するような教員の研修システムの構築を目指すことにある。
最終的には、我が国の造形美術教育を改善し質的な向上を目指すことである。

以下に具体的な研究目的をあげる。
（1）造形美術教育における現状と課題
毎年継続して実施している実態調査結果の考察や他の調査結果などから、造形美術教育における現状を把握すると共に、問題点を明らかにし課題について明確化すること。
（2）造形美術教育の教科構造の明確化
既存の教科の捉え方を抜本的に変革し初等教育の図画工作と中等教育の美術を異なるものとして考えるのではなく、連続した子供たちの成長や発達に即して１つの教科として一貫した「造形美術教育」と捉え、その教科構造を明らかにしていくこと。
（3）既存インターネットコンテンツの考察
既存のインターネット上のコンテンツを検索し考察することを通して、学校教育現場の教師たちにとって必要かつ有効な研修システムとしてのコンテンツについて考察する。
（4）造形美術教育における研修コンテンツ
上記の既存のインターネット上のコンテンツを考察する過程において、特に造形美術教育の視点から教員のための研修システムのコンテンツの要素を明らかにすること。
（5）研修システムの構築
上記の研究の成果から、具体的な教員のための研修としてのコンテンツの要素をもとに研修システムを構築すること。可能ならば、実働し学校現場の教師の意見などを取り入れ改善すること。

3．研究の方法

（1）既存のインターネットの考察
研究方法として、既存のインターネット上のコンテンツを検索し教員研修の視点から考察すること。具体的には北は北海道から南は沖縄までの各都道府県の教員研修にかかわる教育実践センター及び教育研究所等のサイト、図工・美術に関する各教科書会社サイト、民間教育研究団体のサイトなどから個人サイトに至るまでを考察対象とする。インターネット上の既存サイトの考察から、教員研修システムのコンテンツの要素と内容を明らかにしていく。
（2）造形美術にかかわる実態調査
継続して実施している大学生を対象とした小学校「図画工作」及び中学校「美術」に関する実態調査を行う。その実態調査の結果から造形美術教育が抱える問題点と課題を明らかにする。また、各地区及び学校レベルで実施している教員研修会・授業研究会・校内研究会などを活用し、教員を対象にした実態調査やアンケート調査を実施したり、直接学校現場の先生方に教員の研修として求める必要なコンテンツについての聞き取り調査を行う。
（3）教育実践のビデオ記録
教員研修システムのコンテンツとして、重要かつ必要な具体的な教育実践事例のビデオ映像状況を収集すること。具体的には、毎年数回開催される附属学校の公開研究会において、研究授業の教育実践場面をビデオ記録する。他にも、山形市内の公立小・中学校での研究授業やお茶の水女子大学附属小学校の研究授業、さらには実習担当学校における教育実習生の研究授業についてもビデオ記録し収集する。
（4）研修システムの構築
インターネット上の既存のコンテンツの考察と学校教育現場の先生方のアンケート調査結果などから教員の研修システムのコンテンツの要素を元に、研修システムの試案を構築する。

4．研究成果

（1）　造形美術教育の現状と課題
本研究では、前研究から継続的に造形美術教育に関する実態調査を実施し考察してきている。今回は、幼稚園から高等学校までの造形美術教

育を担当する教師たちを対象に実施した県造形教育連盟の実態調査から考察し、主な発表論文①の山形大学の研究紀要にまとめた。また、次の段階として、造形美術教育の中でも特に専門性の高い美術教師の視点に絞り、あらためて深く考察し探求することができた。その研究成果については、主な発表論文③の東北芸術工科大学の研究紀要にてまとめた。

（2） 造形美術教育の教科構造の明確化

前述の造形美術教育に関する実態調査等の考察などから、他の教科以上に教育の質的な格差が生じていることが確認できた。その大きな理由の一つに、造形美術教育の教科構造が明確でなく教師の抱く教育観も個々に異なるということがその主因であると考えた。そこで教員研修システム構築の前段階として、造形美術教育の教科構造の明確化に取り組むことにした。この研究成果については、主な発表論文①の教職・教育実践研究第４号にてまとめた。

（3） インターネット上のコンテンツの考察

上記の造形美術教育に関する研究と併行して既存のインターネット上のコンテンツの検索と考察を行ってきた。第一段階として、北は北海道から南は沖縄までの各都道府県の教教育実践センターや教育研究所の公的なサイトを対象にした。第二段階として、民間の教育研究団体や造形美術教育に関する教科書会社サイトを対象にした。第三段階として個人レベルで運営されているサイトなどを対象にリンクから検索し考察してきた。その過程において算数・理科や英語などの他教科や「総合的な学習の時間」等に比べて、「図画工作」や「美術」すなわち造形美術教育分野については大きな相違が存在していた。それは、まだ掲載されていないものや内容的に不十分なものなど、まさに過渡期の段階の現状と実態を改めて確認することができた。

それとは対照的に私的な個人レベルで優れた造形美術教育のコンテンツを掲載したサイトもわずかではあるが存在し確認することができた。

（4）造形美術教育におけるコンテンツの考察

上記のインターネット上のサイトの考察と共に学校教育現場の先生方の声などから、造形美術教育の研修システムとして必要なコンテンツと有効なコンテンツの要素を明らかにすることができた。その研究成果は、美術科教育学会・大学美術教育学会等にて発表することができた。

（5）「潜在的なカリキュラム」の重要性と課題

本研究の一番大きな成果としては、研究過程において造形美術教育の在り方を質的に左右し大きな影響を及ぼす「潜在的なカリキュラム」の存在と重要性に帰着できたことがあげられる。

「潜在的カリキュラム」とは、教師の意識の外で無意識の内に児童・生徒に大きな影響を与えている教育規範・価値等で学習空間そのものも含むものであり、教育の質を左右する。

ゆえに本研究の目的である教員の研修システムにとっては「潜在的なカリキュラム」の理解と意識化については、不可欠な重要なコンテンツとなり得ると考えた。

しかしながら、この重要な要件については、教師一人一人の教育観や児童・生徒観、そして結果的には評価観にまで、教師の無意識の内に形成されているのが「潜在的なカリキュラム」である。それ故無意識のものを意識化させることの難しさ、つまり目に見えない無意識のものを具現化し研修の具体的な対象にする困難な課題と問題点があらためて明らかになった。

（6）今後の研究課題

本研究における今後の課題としては、具体的により良く学校の教育現場に有効に生かされるような本当の実用化を目指した研修システムを構築し実働化させることである。そのためにインターネット研修システム上のコンテンツについてのさらなる実践的な検証は必要である。

どのようなコンテンツが実際の造形美術教育の実践において必要なのか、教員の教育観・評価観を改善していくのか、教育方法について指導改善の有効なヒントとなるのか、教員研修システムのさらなる充実と有効性における質的な考察について今後の研究において必要である。

インターネットの大きな利点は、「自由」な時間に好きなだけアクセスし活用できるオンデマンド性の大きなメリットが存在するが、その反面、便利すぎて逆に活用されない「自由」さが持つデメリットも存在していると考える。

学校教育現場の先生方が多忙な環境ゆえに、所属する学校の研究委嘱や管理職からの依頼や要望がない限り、自己意欲のみで自主的に研修システムを活用するのかは、大きな課題となる。そのような多忙な職場環境でもこの研修システムが有効に活用されるような実用化という課題が、今後の研究の焦点となる。

（7）造形美術教育の質的な改善を目指して

近年の『学力』問題等において読解力をキーワードに国語や数学などが重視されている一方

で造形美術教育の教科は影が薄くなっている。本来『学力』は読み書きの能力面ばかりではない。我が国の教育を考え目の前の子どもたちの健やかな成長や伸長を願うならば広い視野に立って『学力』を捉える必要がある。バランスのとれた学力を身につけさせるためには、造形美術教育も重視されなければならないはずである。

あらためて造形美術教育は何を求め、そして何を目指していくべきか。目の前の児童・生徒にどのような力を身につけ、これからの社会に貢献するべきなのか、この教科の意義と教育のあり方を問い直す必要に迫られていると考える。

造形美術教育は楽しく自由にやらせればそれで良いという時代はもう終焉を迎えている。教員研修のあり方も形骸化された形式的なものであってはならない。この課せられた教育的な課題にこたえられるような本当の教員研修システムが求められると考える。

本研究の最終目的はインターネット教員研修システムを構築で完了するものではなく、あくまでもわが国の造形美術教育を質的に改善し、実質的により良くなることの実現である。

（8）真の研修システムの在り方

造形美術教育における教員研修システムというと、小学校の「図画工作」や中学・高等学校の「美術」などが表現教科故に、とかく絵画や彫刻、工作などの表現技法や専門的知識、その指導方法のスキルを教師たちが学び習得し身につけさせるものと単純に思われがちであるが、そのような造形美術に関する表現技法や知識以上に重要な事柄が存在するのである。

教育実践を通して児童・生徒をはじめその保護者や社会一般にも造形美術教育の意義や役割が実感をもって理解されることが重要である。

これからは、表現技術や技法の能力や才能に長けた美術教師というよりも、授業を通して、世の中に造形美術教育の意義と有用性を広くアピールし、子どもたちや一般の人々に、この教科の必要性と意義を納得させられるような教員が、益々求められると考えるのである。

研究主題にある教員研修システムとしては、そのような造形美術教育の本当の意義と有用性を児童・生徒たちに理解させ、教育できる先生方を一人でも多く育てられるような、本当の意味での真の研修システムが求められると考えるのである。これからも継続して研究していきたい。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 降籏　孝、「造形美術教育の教科構造の明確化－造形美術教育において育てる『能力』の視点から－」、教職・教育実践研究第４号、山形大学教職研究総合センター、2009 年３月、pp. 61 － 70

② 降籏　孝、「生活の中の『色』に着目させた美術教育実践」、平成 20 年度大学と附属校園の共同研究報告書、山形大学、2009 年３月、pp. 27 －32

③ 降籏　孝、「〔美術教育〕の現状とその課題－実態調査結果からの考察－」、『REVIEW　15』、東北芸術工科大学紀要、2008 年３月、pp. 104 － 117

④ 降籏　孝、「造形美術教育が目指すべきもの」、成 19 年度大学と附属校園の共同研究報告書、山形大学、2008 年３月、pp. 38 －43

⑤ 降籏　孝、「教育現場における造形美術教育の実態と課題－山形県造形教育連盟実態調査からの考察－」、山形大学紀要（教育科学）第 14 巻第２号、2007 年２月、pp. 141 – 158

〔学会発表〕（計３件）

⑥ 降籏　孝、「図工美術の基礎基本を生かして」、第 29 回山形県造形教育研究協議会最上地区大会　分科会助言、於山形県新庄市立ゆめりあ、2008 年 11 月 14 日

⑦ 降籏　孝、『カリキュラムガイドを柱にした教科性の確立－造形美術教育の質的改革－』、第 46 回 大学美術教育学会兵庫大会、於 神戸国際プラザ、2007 年 11 月 19 日

⑧ 降籏　孝、「教員研修システムの要件－造形美術教育におけるコンテンツ　－」、第 29 回美術科教育学会金沢大会、於金沢大学、2007 年 3 月 25 日

6．研究組織

(1)研究代表者

降籏　孝　（FURIHATA TAKASHI）
山形大学・地域教育文化学部・教授
研究者番号：20302284